

## ラヴィルマルケとリユーゼル（五）

—いわゆる「バルザズ・ブレイス論争」について—

梁川英俊

### VIII 「バルザズ・ブレイス論争」の始まり

#### 新しい民衆歌集の構想

『聖トリフィヌ』の出版後、リユーゼルが新たな目標として定めたのは民衆歌集の出版だった。前にも触れたように、彼の民衆歌の採集歴は長く、すでに一八四〇年代から始まっていた。ブルターニュ演劇の写本の調査が一段落した後、その関心が民衆歌に向かったのも当然のことだったのである。一八六五年八月、彼はルナンに宛てて、民衆歌の調査のための助成金を獲得する可能性を打診する。同じ書簡で彼はまた、良い図書館のあるブルターニュの町かパリへの転勤の希望も仄めかしていた。一八六二年に不本意な理由でカンペールのコレージュを去ってからはしばらく教職を離れていた彼は、一八六四年十月にコレージュの教師としてロリアンに赴任していたが、給料も上がらぬまま仕事の量のみが増えることへの不満を抑えきれなくなったのである。しかしこの二つの願いは、ルナンの尽力にもかかわらずなかなか叶えられなかった。六六年一月、リユーゼルはルナン宛ての書簡で再度助成金に言及して、こう言う。

公教育相がこの調査を援助してくれ、『バルザズ・ブレイス』のいわば補遺をなす歌集の出版を資金面で助けてくれれば嬉しく思います。ご存知のように、ラヴィルマルケがその文学的知識の最良の束を持ち帰った畑は大変に豊かで、なお収穫すべきものに溢れているのです(1)。

しかし彼が公教育相から受け取った返事は、本年度は財政難のためいかなる調査にも援助をするわけにはいかないという厳しいものだった。折り返しリユールは、助成金なしの有給休暇による調査の可能性を打診する。が、これもロリアンのコレージュの財政難を理由に拒否されてしまう。翌六七年二月、リユールはルナンに宛ててこう書く。

公教育相にバス・ブルターニュ地方の文学に関する調査のための助成金の申請をしてから、もうすぐ三ヶ月になります。目的はこの地方でなお歌われているあらゆる種類の民衆歌の採集で、そうした歌はいまも先祖たちの歌や伝承を記憶している最後のブルトン人とともに、近い将来、永久に消え去ってしまったのではないかと危惧されるのです。(……)

二〇年以上前から、私は田舎で民衆歌の採集を続けていて、それもすでにかなりの数に達しており、中には大変興味深いものもあります。私はそうした歌を出版して、手直ししたり、付け加えたり、作り変えたりということが一切ない、真の意味で民衆的なブルトン語の歌集を作りたかったのです。(……)しかしこの仕事をよい条件で行うためには、もう数ヶ月田舎を駆け回り、さらに歌のヴァージョンを豊かにすべく、他の地域で異なったヴァージョンの歌を採集しなければなりません(2)。

先の書簡で、自分の歌集を「『バルザズ・ブレイス』のいわば補遺をなす歌集」と位置付けていたりユーゼルは、この書簡ではそれを「手直ししたり、付け加えたり、作り変えたりということが一切ない、真の意味で民衆的なブルトン語の歌集」と呼んでいる。この名称の変化は、この一年ばかりの間にリユーゼルの意識に起こった変化を明らかに示していた。では、その変化とはどのようなものだったのか。

### 『バルザズ・ブレイス』第三版

一八六七年初頭、『バルザズ・ブレイス』は久々に改訂され、新たな装いで世に出る。第二版が出てからほぼ二〇年ぶりのことだった。しかしこの版に新しく付け加わった歌は少なかった。それは「歴史的な歌」では二篇（「ゆりかごのメルラン」と「メルランの改宗」、従来は「愛の歌」という分類であった「祭りの歌と愛の歌」では一篇と、全体でわずか三篇にとどまった。巻末に付けられた楽譜の数は、旧版に比べて四七から七四へと大きく増えていたものの、その内容において新版は旧版とほとんど変わるところがなかったのである。

大きな変更があったのは、むしろその体裁であった。それまで二巻本であったのが、この版では一巻にまとめられ、左ページにブルトン語原文、右ページにフランス語翻訳という従来の形式も改められて、新版ではフランス語の翻訳が大きく印刷され、ブルトン語の原文はページ下に小さな活字で印刷されていた。つまり新版では、旧版では対等であったブルトン語とフランス語の関係が、はっきりとフランス語を重視する方向へと変わっていたのである。新しい『バルザズ・ブレイス』が対象としていたのは、紛れもなくフランス人の読者であった。

新版は一般には好意的に迎えられたが、専門家の反応は幾分異なっていた。なによりも改版までの二〇年の歳月は、口承文学の研究にいっそうの厳密さをもたらさずにはおかなかった。それを示すのが、一八六七年二月十六日発行の『歴史・

文学批評』 *Revue critique d'Histoire et de Littérature* に掲載された二つの書評である。まずアルボア・ド・ジュバンヴィル Arbois de Jubainville は、『バルザズ・ブレイス』に収録された歌の文学的価値を称賛する一方で、その文献学的内容の不十分さをこう指摘していた。

まずわれわれにとって残念なのは、著者が出版した歌が、もっぱら歴史的・美的関心から選ばれていることだ。(……) ブルターニユの文学のような貧しい文学を対象とするとき、基準はもつと緩やかな方がいいのではないか(……)。ド・ラヴィルマルケ氏がこの新しい版でヴァリアントを掲載せず、ルゴニーデックが無視した文法形式の批判的検討や、この学者の『ブルトン語フランス語辞典』に欠けていた単語の用語解説を付け加えなかったことが悔やまれる(3)。

いまひとつ、ポール・メイエ Paul Meyer による書評には、ジュバンヴィルのもの以上に具体的な批判が含まれていた。彼はまず『バルザズ・ブレイス』の初版の出版から新版の登場までの間に民衆歌の研究に起こった変化を顧みてこう言っていた。

『バルザズ・ブレイス』の初版は、ド・ラヴィルマルケ氏がそうしたように、文学的でありブルターニユ的でなければならなかった(……)。しかし『バルザズ・ブレイス』の後に出版された多種多様な起源の歌集との比較は、幾つかの新しい観点を浮かび上がらせ、いまやその観点を無視して民衆歌について語ることはますます困難になっている。美的関心が徐々に批判的要求に道を譲っているのである(4)。

一八三九年、ロマン主義の時代に二十四歳の青年が発表した歌集は、彼が五十二歳になったいま、明らかに時代の学問的要求を満たし得ないものとなっていたのである。しかし、にもかかわらず『バルザズ・ブレイス』の著者は、初版から二八年間、その姿勢を変えず、また提出された疑問に答えようとしめない。メイエが問題にしたのはこの無策であった。彼は著者が新版すべきであったことをこう列挙した。

これ以上反論を増やしても仕方あるまい。あとは『バルザズ・ブレイス』を科学の名に値するものにするためにはどうすればいいかを言うだけだ。テキストについては、もつとも古いと思われるヴァージョンに従って歌を提示しなければなるまい。注にヴァリアントを掲載し、ヴァリアントはやむを得ぬときにしか本文のなかに入れてはならないし、その場合は読者にその旨告知しなければならぬ。説明については、『バルザズ・ブレイス』の初版の出版当時には価値をもつたが、その後の民衆歌に関する比較研究の成果と矛盾を来たすようになった仮説は、すべて廃棄しなければなるまい<sup>(5)</sup>。

『バルザズ・ブレイス』第三版の出版は、それまで過去のものとして語られがちであったこの歌集を、再び現在の出来事として捉え直す契機となった。その意味で、この新版の登場は、「バルザズ・ブレイス論争」の真の開幕を告げる合図であったと言える。ルメンはこの前年、すでにこの歌集について多くの疑念を口にしていたりユーゼルにこう書いていた。「彼が『バルザズ・ブレイス』の新版を出すまで待つていれればいいのです。そうすれば、彼が犯した過ちを指摘したり、あなたが発見したペテンを明るみに出したりする機会も自然にやって来ることでしょう<sup>(6)</sup>」。

## 『バルザズ・ブレイス』への疑念

それにしても、リユーゼルはいつから『バルザズ・ブレイス』に疑念を抱くようになったのか。すでに見たように、少なくとも一八六〇年代の初頭まで、『バルザズ・ブレイス』は彼の枕頭の書であった。ラヴィルマルケと写本をめぐって争った「聖トリフィーヌ事件」においても、彼はラヴィルマルケに対して個人的な不信感をあらわにすることはあっても、それを『バルザズ・ブレイス』にまで向けようとはしなかった。その彼が、なぜここに来てその「誤り」や「ペテン」について語るようになったのだろうか。

最初の兆候が見られるのは、一八六六年四月十日付けのルナン宛の書簡である。リユーゼルはそこで自分が準備している歌集の説明をしながら『バルザズ・ブレイス』に言及し、その著者を前世紀に贋作疑惑でヨーロッパ中を騒がせた『オシアン』の著者になぞらえて、「われらが新しいマクファアソン」と呼んでいた。もつとも、この書簡はその呼称の理由については語っていない。それが語られるのは、翌六七年七月二十四日付の同じルナン宛ての書簡においてである。彼はこう言っていた。「『バルザズ・ブレイス』の著者は、ほとんどいたるところで手を加え、改竄し、捻じ曲げ、通りをよくしたり穴を埋めたりしています。たくさんの歌をその本来の方向から切り離し、なんと少しでもわれわれのブルターニュで起きた重大事件と関連づけようとするのです。加えて、私は彼の歌のうちもつとも古いものは彼のでっちあげだと考えています<sup>(7)</sup>」。

この書簡を皮切りに、リユーゼルは堰を切ったように、ルナンに『バルザズ・ブレイス』に対する批判を繰り返すようになる。ところで、こうした批判の大半が、六七年に書かれていることに注意するべきだろう。この年、リユーゼルは「私の『バルザズ・ブレイス』」と呼ぶ民衆歌集の制作に没頭していた。彼の『バルザズ・ブレイス』に対する疑いは、おそらくこの歌集の計画とともに芽生え、その進行につれて大きくなっていったのである。同年九月五日の手紙で、彼はこう

語る。「仕事が進めば進むほど、ラヴィルマルケ氏がブルターニュでマクファーソンの役を演じており、われわれを四半世紀に渡って騙してきたのだという感を深くします。この抜け目ない男は巧妙な山師なのです」。

では、どう「巧妙」なのか。リユーゼルはそれを歌集の冒頭に置かれた「連」*Les Series* という歌でこう説明する。

私はブルターニュのあちこちで、この歌のヴァージョンを八つ採集しましたが、そのすべてが同じ「蛙の晩課」*Gousperou ar Ramed* という題で、まともな意味などない、延々と続く支離滅裂体なのです。私から見れば、これは明らかに単なる遊びであり、完全押韻を探すための農民の訓練で（実際、私が採集したヴァージョンでは、押韻はこれ以上ないほど完全です）、意味だの理由だのを気にする必要のないものです。それはこの歌が「蛙の晩課」と呼ばれることを考えても、十分に明らかではないですか。運命や宇宙論や地理や魔術や輪廻などに関するドルイドの教義を開陳しているなんてとんでもない。

つまり、ラヴィルマルケはもともと何の意味もない支離滅裂な問答歌を、意図的にケルトの古代と関連づけるために、オリジナルの内容に手を加えたというのである。そればかりではない。彼はまた歌でブルターニュの歴史をつくるという目的を達成すべく、現実には存在してもいない幾つかの歌を捏造しさえしたのである。リユーゼルはこう続ける。

グエンフランやメルランやアースーヤノミノエやガリア人のワインやレズ・ブレイス（創られた名前ですが）等に関する歌については、問題はさらに厄介だと思われます。二十年以上、あちこちで民衆歌を採集してきましたが、こうした歌など一節も聴いたことがありません。歌われている人物の名前すら聞き覚えがないのです。いろんな人に訊ねてみ

ましたが、答えは皆一緒です。歌も名前も聞いたことがないというのです。正直に申し上げて、これが私がこうした歌の存在を疑う唯一の理由です<sup>(10)</sup>。

実際、この年、リユーゼルは友人知己に手紙を出し、こうした歌を実際に聴いたことがあるかと訊ねていた。たとえば、詩人のプロスペル・プルー Prosper Proux は彼にこう返答した。「私はブルターニュのあちこちに住みましたが、そこでゲンフランやアーサーやミノエやメルランやレズ・ブレイスの名前が口にされるのを一度だつて聴いたことがあります。加えて言えば、こうした輝かしい名前が出てくる歌も断片も採集したことはありません<sup>(11)</sup>」。つまりリユーゼルは、この時期、ラヴィルマルケに対する一連の疑惑の正当性をリアルタイムで確認しつつあったのである。書簡の口調が多少興奮したものになるのも無理はなかったのである。もつとも、書簡が伝えていたのはリユーゼルの興奮ばかりではなかった。それはまた、厄介な出来事を前にした彼の不安や困惑も隠さずに伝えていたのである。リユーゼルはこう語る。

私はラヴィルマルケ氏の手口や欺瞞を明らかにしなければならぬでしょうか。正面から攻撃すべきでしょうか、あるいはただ自分の歌集を出し、それを批評に委ねるだけに留めておくべきでしょうか。しかしブルトン語文学に通じている人はわずかしきありません。そしてラヴィルマルケ氏はそのなかでもつとも影響力があり、策士なのです。だからこそ助言をお願いしているのです。私は困っているのですから。しかも、私はまたこの仕事が自分の力や知識を超えているのではないかと感じているのです。(……)この妙な男が私たちを騙しているということは分かるのですが、ではどれほど騙しているのか、それについて何を言えるかということになると、よく分らないのですから<sup>(12)</sup>。



## ルナンの反応とルメンの転向

こうしたリユーゼルの問いかけに、ルナンは九月二十二日付ですぐに次のような返答を送った。

民衆歌の出版に関して、私のできる助言は二つだけです。科学の最高の掟は絶対的な誠実さです。思うことをすべて口にしてかまいませんが、その場合、個人攻撃はいけません。千年も二千年も前につくられた歌のコレクションを相手にするかのようには、問題を議論してみてください。私もあなたと同様、ド・ラヴィルマルケ氏はしばしば自分勝手な解釈をして歌を聴き、種々の先入観に捉われて、自分の学説に合うヴァージョンを提出し、望むままの歴史的なこじつけを行ったと思っています。批判的・文献学的観点からすれば、その仕事は無価値です。しかし、だからといって私は彼がそれを自分で作ったとは思いませんし、故意に改竄や加筆を行ったとも思いません。私の『ケルト民族の詩歌』はお読みになりましたよね。そのことについては、たぶん個人的にあれこれと気遣いながら、でも重要なことはちゃんと指摘しつつ、そこに書いたはずですよ<sup>(13)</sup>。

ルナンの立場は明確だった。彼はときに感情論に走りがちなりユーゼルに対して、作者を攻撃するのではなく、あくまでも作品を客観的に論じるように注意を促す。そのうえで、彼はラヴィルマルケの解釈が先入観から来る恣意的なものだという点には同意しつつも、それが意図的な贋作であるという意見に対しては、はっきりと異議を唱えるのである。この点で、その主張は『ケルト民族の詩歌』以来、まったく変わっていないと言っている。一方、リユーゼルはテキストの背後にラヴィルマルケの意図を想定せずにはいられない。彼はルナンの寛容さに苛立ちながら、こう返答する。

